



図一三. 相対照度とクロロフィル a, b 比

48. クズ薬剤枯殺の事業的効果について

宮崎県林務部 石川 忠雄

1. はじめに

近時薬剤によるクズ枯殺が相当の普及をみているが、造林地において事業的に実施した場合の効果の把握およびそれに関連した 1, 2 の調査を実施したのでその結果を報告する。

2. 薬剤枯殺実施地のクズ残存株数

(1) 調査地

昭和45年4月から昭和46年6月までの間に何らかの薬剤を用いてクズ枯殺を行なった民有林地を任意に選

定した。

(2) 調査時期

事業実施後6カ月～12カ月経過後に調査した。

(3) 調査方法

造林地中クズが割合に多い箇所に4m×5mのプロットを取り、つるをたどって根株をさがし、その株から発生しているつるを全部巻き取ってのけることをくりかえして残存株数を調査した。

(4) 調査結果

調査結果については表1のとおりである。

表 1 薬剤枯殺実施地のクズ残存株数

調査地	使用薬剤名	処理法	林令	プロット面積	プロット内クズ残存株数	ha当り換算クズ残存株数
No. 1	ブラッシキラー粒剤	全面散布	8年	20m ²	8株	4,000株
No. 2	デゾレート 50	株処理	2年	20m ²	9株	4,500株
No. 3	バインキラー	〃	10年	20m ²	6株	3,000株
No. 4	ケイピン	〃	12年	20m ²	3株	1,500株
No. 5	バインキラー	〃	2年	20m ²	6株	3,000株

3. クズ残存株の内容

2の調査でかなりの残存株があることがわかったのでその内容について調査地 No. 4, および No. 5 で調査した。調査結果は表2のとおりで、残存株の半数以上が作業中の見おとしによる未処理株であることがわかった。

表 2 薬剤処理地における残存株の内容

調査地	残存株			備考
	処理済株	未処理株	計	
No. 4	10株	15株	25株	処理済株の勢力は弱い。
No. 5	15株	20株	35株	〃

4. 未処理造林地におけるクズ根株数

薬剤枯殺効果の把握をするためには未処理造林地におけるクズ根株数の調査が必要であるが、本県県営林で掘取枯殺を実施した資料があるので、これと対比することにした。

(1) 掘取り枯殺地

県営林担当事務所ごとに1カ所づつ実施した。

(2) 調査方法

クズの多い箇所プロットを取り、プロット内のクズ根株を掘り取って数えた。

(3) 調査結果

調査結果は表3のとおりである。

表3 未処理造林地におけるクズ根株数

調査地	林令	プロット面積	プロット内クズ株数	ha当り換算クズ株数	備考
No.1	1	50m ²	570株	11,400株	
No.2	2	50m ²	530株	10,600株	
No.3	4	100m ²	662株	6,620株	
No.4	4	100m ²	630株	6,300株	
No.5	6	100m ²	143株	1,430株	
No.6	6	100m ²	60株	600株	

5. 事業的効果について

以上3つの調査結果からみて、薬剤枯殺の事業的効果はかなりあったものとする。しかしさらに効果をあげるためには

- (1) 見おとしによる未処理株をいかにして少なくするか。
- (2) 種子から発芽して繁茂するクズをいかにして少なくするか等の問題点も多い。

49. 林地除草剤試験

鹿児島県林試験場 田中郁太郎

最近ススキに対する除草剤として脂肪酸系の除草剤が実用化され、ススキの殺草効果が大いことが各地で実証されてきた。しかしながらこれらの薬剤は殺草効果はかなり大きいため使いかたによってはかなりの植生の変化がみられる。今回散布後3年間継続調査を実施した結果について報告する。

試験方法

1. 使用薬剤および散布量

No.	使用薬剤	散布量	備考
1	NaClO ₃ 50%粒剤	1.0kg/a	手撒きスポット散布 4倍の水を添加 押し噴霧器で散布
2	"	1.5kg/a	
3	TFP 30%液剤	100cc/a	
4	"	167cc/a	
5	無散布区		

2. 薬剤散布日昭和43年4月13日

3. 試験区

同一山系にある、やや湿潤地(BD崩積型土地)と、やや乾燥地(BD(d)型土地)のススキ繁茂地に設定、薬剤散布の翌日、やや湿潤地にはスギ、やや乾燥地にはヒノキを植栽した。

調査結果

1. 散布前の植生状況

試験地は過去7年間ススキの叢生していた場所である。薬剤散布時のやや湿潤地におけるススキ株数は、47株/a、平均株直径は52cmであった。やや乾燥地は叢生状態で株としてはままとまっていなかった。

2. 土壌および地形